

「確かな学力」が不足しているのは実は特別支援学校の先生!?

『結構ショッキングなタイトルを付けました。ボク自身もそうですが、初任の頃から以下のような疑問をもち続けていて、もう15年以上も「本当のことって何だろう?」って、一生懸命に答えを追っています。

生活単元学習って一体何を教えるんだろう?

もじ・かず以前の指導ってどんな仕組みと順番があるんだろう?

感覚(センソリー)の発達とからだの発達とはどうつながっているんだろう?

知的障害のある人の教育ってどうあるべきなんだろう?

『ボク自身もまだ明確な答えを持ち合わせていませんが、少しほかってきたこともあります。それは、子どもも先生も「問題発見・解決」にまつわる頭の使い方は同じだということです。つまり、

- ① 子どもと同じく、先生だって元手となる知識や技能を「確かな学力」として蓄えて、
- ② めっちゃ考えて、自分や他人と対話する中で、判断したり表現したりして主体的に問題を解決していく。
- ③ 結果、意味づけ・価値づけ・重みづけ・方向付けが成され、今後の学びや人間性につながっていく。

逆から言えば、

- ① 特別支援学校の先生に「考える」ための元手となる特別支援に関する知識や技能が不足していると…
 - ② まともな思考や判断、表現ができず、問題や課題の解決が受動的(他人任せ)になりやすい。
 - ③ 先生自身の自己有用感にもつながらず、意味づけ・価値づけ・重みづけ・方向付けも起こらない。
- ということになります。元手となる特別支援への知識や技能が絶対的に不足している先生は、その先の「考えた上での判断や表現」に行けません。100円しかない人は1000円のものを買えないのと一緒にです。

『「生活単元で何をすればいいかわからない」「国算の発達が緩やかなグループの担当になったけれど何を教えればいいかわからない」「姿勢が不安定、視線が不安定な子に何をすればいいかわからない」「あの先輩の先生とこの先輩の先生の言っていること、どっちが正しいか判断が付かない』(笑)…等々。その殆どが知識不足・技能不足に挾っています。教育課程編成要領委員でも話題になりましたが、特別支援教育は今まさに「経験論⇒エビデンス・ベース」への転換期で、色々な考え方の人が混在しています。その中で「特別支援への基礎的な学力」を付けないまま歳だけ重ねると、ヘタすると「長くやってきた」という「自負」だけが育つので「『違う』と言ってくる先生とはウマが合わないだけだ!このままで良いんだ!」という「自己優位性保持のための他者の押し下げ」や、「防衛反応」が起こります。逆に「特別支援に関する確かな学力」に自分の判断や表現が裏打ちされるようになると、それが自分自身を支えるので、他人を低める必要自体がなくなります。

まずは△を狙う。自分以外の人が色をつける余白を認める。

『「教育」全般に亘ってですが「○」の教育効果ってなかなか出ません。裾野の広い特別支援教育においては尚の事。たくさん勉強をして、元手となる知識を増やして、考えて考えて答えを出しても「○」の教育効果は

なかなか出ない。逆に「○」を狙う事に執着すると、教材の質に囚われて時間がかかったり、作成に無駄に時間がかかって提示のタイミングが遅れたりしますよね。そこで、以下はボクがまだ27,8歳の頃に筑波大学附属大塚特支の安部(あんべ)先生(現・創価大学教授)という著名なコーディネーターの先生の講義で聴いたことなのですが、まずは「△」をねらう心構えていると結構良いんですよ。そこからじわじわと「○」に近づけ、行ける時には「○」を狙う。また、「△」狙いであるがゆえの他の人が助けてくれたり作ってくれたりする「余白」の存在を認めることで、チームプレイにもつながります。特に若手の皆さんには、これからどんどんと自分の時間が無くなります。そんな時には「△」を狙うことや余白の存在を認めることができますよ。きっと。

知徳体：アナタの心の成熟は、子どもの心の成熟につながっている

『私たち教員は、どうしても自分が受けてきた教育のイメージがあるので、「外側」の子どもの知識や技能の上達に目を奪われて、それを「教育の成果」だと思ってしまいがちです。しかし、繰り返してきた通り実は「内面」の学びの意味付け、価値づけ、重み付け、方向づけが超大切です。「周りを幸せにすべく頑張る」とか。「社会をより良くしてくための小さな一歩として、これをする」とか。「人を救し、愛し、生きていきたい」とか。そういう生涯を通じての「内面」の灯火になるような考え方や姿勢、心の有り様は「目に見える知識や技能の上達」から少し離れた所の「こういう風な人間で在れるといいよね」とか「こういう風に考えられるといいよね」という「内面」への指導・支援によって育ちます。そして、それこそが「生きる力：知・徳・体」の「徳」の部分への取り組みです。そういう意味で、アナタの心の在り様や道徳心、徳目(総じて先生(アナタ)の心の成熟)は常に試されますし、教員自身も内面を成熟させていく営みが必要ですよね。小説や自己啓発本を読むのもいいでしょう。教員以外の職業の人と交わるのもいいでしょう。恋をして好きな人の為に自分を磨くのもいいでしょう。その中で「自分はどう在りたいのか?」「人ってどう在るといいのだろうか?」なんて少しずつ考えられると、きっと自分自身の成熟につながりますし、「ダメ!」「いけません!」だけで止まるような指導・支援の仕方も変えられるのでしょうか。